

タマネギ

原産地は、中央アジア。日当たりと排水性のよい場所を好む。ユリ科植物。
日本では北海道が最大の生産地。
年中使用する野菜。

栽培ポイント

- ・苗選びは太さに気をつける。
- ・有機質を多く入れ、土づくりをしっかりと行う。
- ・追肥は2月下旬までに終了する。
- ・とう立ちの原因になるので播種の適期を守る。
- ・日当たり、水はけのよい圃場を選ぶ。

栽培カレンダー

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
一般地					□	—	□		○	○		△	△
	○ 播種			△ 定植		□ 収穫							

栽培手順

1.土づくり

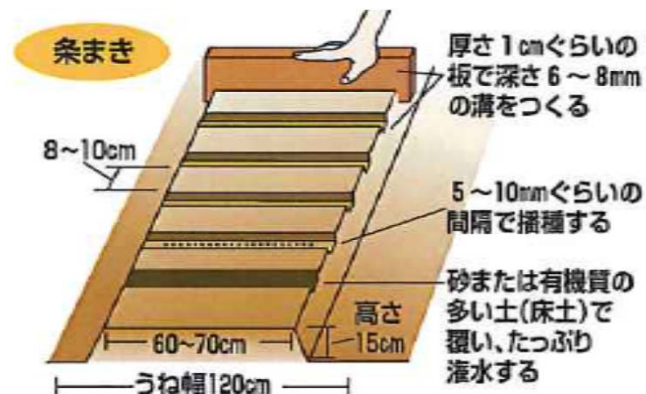
・アルカリ性土壌を好むので、石灰資材をしっかりと入れて、緩効性用有機質肥料を多く入れ播種の1週間前に、畝をつくりマルチを敷いておく。

育苗床 (施肥例)	例 1a 完熟堆肥 150kg 苦土石灰 10~15kg 苦土重焼燐 5~10kg 化成肥料 8~10kg
--------------	--

本圃 (施肥例)	元肥	完熟堆肥	2,000kg
		アズミン苦土石灰	80kg
		リンスター	40kg
		IB化成	(16-10-14) 150kg
	追肥	磷硝安加里	(16-10-14) 40kg
施肥例 (10a)			

2.播種

・早生種 9月上旬～ 中晩生種 9月下旬～
20cm間隔で深さ1cmの播き溝にすじまきする。発芽まではかん水はこまめにする。
発芽したら条間を軽く耕し、混んできたら間引きをする。(2~3cm間隔)
2週間後に30g/1aの追肥と土寄せも行う。



(参考: タキイ種苗)

3.定植

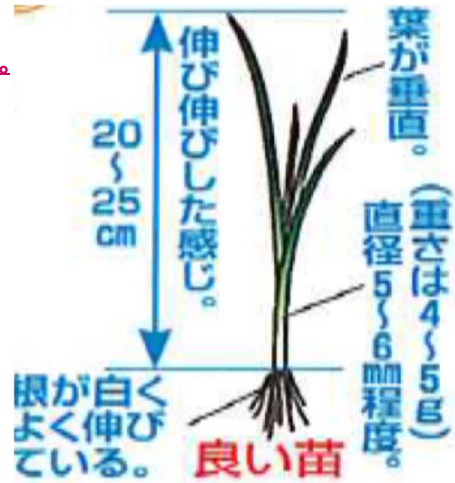
・定植の深さは重要で葉しょう部の約2分の1の深さまで土に埋める。

* 深植えは翌春の生育に影響して腐ってしまう原因になる。

・理想の苗

本葉3~4枚、草丈25~30cm、重さ4~6g

★大苗はトウ立ちや分球、極端な小苗は生育不良の原因になる。



(参考: タキイ種苗)

4.追肥

★追肥は栽培期間中に3回!

・1回目 1月中旬

・2回目 2月中旬

・3回目 3月中旬(止め肥)

3月の追肥は重要になります。時期を間違えると貯蔵性が悪くなるので要注意です。

たまねぎは、葉に先行して根が伸びて肥料を吸収する。2回目までの追肥は、3月に気温が上がってから生長を始めるための栄養分になる。

* 気温が低く生長が葉の生長がゆっくりと進んでいる時期から、根はすでに春に備えて栄養分を蓄えている。

3月の追肥は、春になってりん葉ができ、肥大していくための栄養分になる。つまり、たまねぎの形ができてそれが大きく生長するために必要。たまねぎの肥大は、4月の中旬ごろから始まり、6月の収穫時期まで続く。

* 球の肥大が始まる時期に肥料を与えるとたまねぎの球は大きくなるが、しまりがなく腐りやすくなってしまふ。また、遅い時期の追肥は、病害虫の発生を招いてしまふ。

5.収穫

- ・収穫適期は、葉が根元から自然に倒伏したら天候のいい日に収穫する。
- ・倒伏したものから収穫するが一気に収穫したい場合は全体の8割程度の葉が倒れた頃が目安になる。

* 貯蔵

- ・茎が乾燥したら、4～5個ずつ葉のつけ根をヒモで縛って吊るす。
- 風通しがよく、雨、直射日光が当たらない場所に吊るしておくで長期保存できる。

★貯蔵目安期間★

- ・極早生種は水分が多いため貯蔵にはむかない。
- ・早生種 2～3か月 中生種 5～6か月 晩生種 最長9か月

たまねぎの花芽文化と抽苔

・ある一定の大きさに達した苗が、低温に一定期間あつて花芽を文化して、長日条件のもとで抽苔が促進される。一般に大苗になるほど低温の影響を受けやすい。

* 早生品種は抽苔しにくい性質をもっている。

とう立ち(抽苔)の原因

- ①播種時期や天候による生育の前進
- ②遭遇する低温の時期と量
- ③低温遭遇時の株の栄養状態



(参考: タキイ種苗)